

視野研究会

三宅 養三

(愛知淑徳大学)

はじめに

昨年までは日本眼科学会総会で開催されていた専門別研究会である「視野研究会」は、今年から日本臨床眼科学会に移り、2008年10月23日午前に開催された。参加者は200名を越し、盛会であった。

研究会会長である北原健二先生は、この会を最後に会長を降りられることを春の日本眼科学会総会での世話人会で表明されていた。しかし北原先生は今回の会に欠席されており、会の後で開かれた世話人会で、「体調を崩しており、皆様によろしく」との伝言が報告された。日本臨床眼科学会が終わった直後の10月28日に、ご逝去されたとの知らせを受けた。北原先生は長きにわたって視野研究会に多大の貢献をされ、2005年から会長を務められた。この場をお借りして先生の視野研究会に対するご遺徳を偲び、心よりご冥福をお祈り申しあげる。

今回の研究会は一般演題6題、シンポジウムで5題、特別講演1題を企画した。各演者の内容を簡記する。敬称は省略する。

【一般演題】

一般演題(1)は、各種黄斑疾患における変視症の状態がどのように日常生活に影響するかをM-CHARTS[®]とAmsler Chartsを用いて検討した有村英子(近畿大学)・他の報告であった。両眼開放下で変視が残存する頻度は加齢黄斑変性(AMD)が多く、残存する症例では日常生活で不自由を感じる傾向があった。両眼開放下では中枢からの抑制も作用し、この種の研究は興味深くまた重要であり、今後のさらなる発展が期待できる。(2)は橋本茂樹(近畿大学)・他によるコンピュータシミュレーションによる自動動的視野測定プログラムの評価に関するものであった。このプログラムは網膜疾患、神経眼科疾患、緑内障のすべての症例でGoldmann視野計の結果と類似した結果が得られ、臨床応用できる可能性が示唆された。(3)は(2)と同じプログラムを用いたSSOH(superior seg-

mental optic hypoplasia)の検討で、高田園子(近畿大学)・他により報告された。SSOHでも前の口演を支持するように、Goldmann視野計の結果と類似したSSOHに特徴的な視野変化を検出した。平均測定時間は短く、周辺視野を簡便に測定できる長所を有している。

(4)は南野麻美(二本松眼科)・他による自動視野計を用いた耳側視野障害の評価法に関するものであった。緑内障視野障害でMariotte盲点の耳側に限局したり、あるいはMariotte盲点を含んだ視野障害の診断基準を検討し、独自の案を提案した。(5)の中谷雄介(金沢大学)・他は、緑内障性視神経乳頭変化を有するがHumphrey視野計では正常値を示すいわゆる“preperimetric glaucoma”における、検査点を密に配置したHFA 10-2および微小視野計の異常検出能力を検討した。その結果、前者はアーケード内にRNFLがみられるpreperimetric glaucomaにおいて視野異常の検出に有用であるとの所見を得た。(6)の森瀬章一(帝京大学)・他はFrequency Doubling PerimetryにおけるN-30閾値プログラムと24-2閾値プログラムの比較を緑内障で行った。測定時間はN-30がより短く、特にパターン偏差の結果は両者に高い相関がみられた。

【シンポジウム】

シンポジウム「他の視機能と視野との関連」では、網膜、視神経、中枢の視機能評価に使用される種々の検査結果が、視野検査とどのような関係を有するか論じるのを意図して企画された。

三宅養三(愛知淑徳大学)は網膜の錐体、杆体細胞の機能を視野検査的に評価するため、2色分離法で杆体、錐体機能を分離する方法を示し、錐体ジストロフィや網膜色素変性における結果を示した。網膜色素変性患者で網膜電図(ERG)は消失しているのに、夜盲をほとんど自覚していない症例が時に存在するが、このような症例では黄斑領域にのみ残存している機能のよ

い杆体細胞に依存しているという結果を報告した。双極細胞機能の機能を視野検査で捉える例として、Blue-on-Yellow Perimetry で測定した完全型先天停在性夜盲の結果を示した。この疾患は on 型双極細胞への視覚伝導が選択的に障害されていることが判明している。一方青錐体は赤、緑錐体とは異なり on 型双極細胞にしか連結しておらず、この疾患での結果に興味がもたれた。

國吉一樹（近畿大学）は、網膜機能を ERG でマッピングできる多局所 ERG と視野の結果を比較した。ERG は網膜の第 2 次ニューロンまでの機能を反映するのに対して、視野は全視路の機能評価である。そのため視神経疾患では、視野欠損部から正常の ERG が得られる。眼底に異常がみられない視野欠損を示す疾患で、多局所 ERG が診断の決め手となる occult macular dystrophy と acute zonal occult outer retinopathy (AZOOR) について、その臨床特性を述べた。

角田和繁（東京医療センター感覚器センター）は独自に開発した網膜内因性信号計測から得られる情報を整理して述べ、ERG や視野とは異なった網膜の神経活動を多角的、非侵襲的に評価するイメージング法であり、網膜機能のマッピング法としての実用化に向けた研究の一部を紹介した。

平井淑江（愛知淑徳大学）は下垂体腫瘍の患者に早期からみられる特異な両眼視機能障害を見出し、その障害と視野との関係について述べた。両眼視機能障害は種々の自覚症状として患者が訴え、視交叉は両眼視機能検査機能の要であるため、下垂体腫瘍による視交叉の交叉線維への圧迫は、耳側半盲のみならず微細な

日常の両眼視機能に影響を与えることを力説したきわめて重要な報告であった。

吉田正樹（東京慈恵会医科大学）は、臨床用 3T 装置による中枢性視野障害に対する fMRI および拡散テンソル画像の検討を行った。視野検査で視放線障害が疑われた 2 症例では、両手技ともにそれを反映した結果が得られ、今後のさらなる臨床応用が期待された。

【特別講演】

特別講演は「視覚のロードマップ—君は i を見たか」という題で、柏井 聡（大阪赤十字病院）により行われ、熱のこもった内容であった。視覚のロードマップは網膜地図から始まり、頭部を中心とした頭部座標系さらには空間座標系に至るメカニズムで、外側膝状体の球面座標系から平面座標系への交換が基本である。このできあがった複雑な配線をひも解く過程を、最近の動物実験の結果を交えて明快に説明された。

おわりに

最後に、2008 年 5 月に奈良市で開催された第 18 回国際視野学会の報告が、学会長であった松本長太（近畿大）よりなされた。多くの参加者があり、内容の充実や気候のよい奈良の環境は、参加者に大変な満足感を与え、成功裏に終幕したとのことであった。

今年の研究会は一般口演、シンポジウム、特別講演と多くのセッションを組んだため、各演者の発表時間が十分ではなかった。しかしどの演者も非常によく内容をまとめてくださり、大変理解しやすい講演であったことに感謝申しあげる。北原健二先生の後任に松本長太先生が決まり、この研究会のますますの発展を祈るものである。

MEDICAL BOOK INFORMATION

医学書院

医学書院 医学大辞典 第2版

総編集 伊藤正男・井村裕夫・高久史磨

●A5 頁3560 2009年
定価18,900円(本体18,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00582-1]

総見出し語数10万余・解説項目数5万2,000の圧倒的な情報量、高い信頼性を誇る本邦随一の医学大辞典、6年ぶりの改訂。豊富な図版、全ページカラー刷りのビジュアルティ、厳密な語義解釈による類義語の峻別が特長。全解説項目を最新知見に照らしてアップデートし、見出し語を1万余り拡充するとともに、読み仮名を併記。さらに、コンパクトな判型に変え、使い勝手を大幅に向上させた。